

郁達夫文集

第七卷

花
城



郁達夫文集



第七卷 文论、序跋

上文



花 生活

新

花 城
生活·讀書·新

花 生活

装帧设计 林 墉 刘世仁 尹 文
特约编辑 王自立 陈子善
责任编辑 邝雪林 潘耀明 林振名

郁达夫文集

(国内版)

第七卷·文论、序跋

*

花 城 出 版 社

(广州市大沙头四马路)

生活·读书·新知 三联书店香港分店

(香港中环域多利皇后街九号)

联合编辑出版

广东省新华书店国内总发行

生活·读书·新知 三联书店香港分店海外总发行

广东新华印刷厂印刷

850×1168毫米 32开本 11.125印张 4插页 240,000字

1983年9月第1版 1983年9月第1次印刷

书号 10261·255 定价 1.35元

D181

目 录

今日的中华文学（上）	1
今日的中华文学（下）	5
中国文学的变迁	9
鲁迅的伟大	26
写作的经验	28
对福建文艺界的希望	31
说闽剧的布景	33
介绍《回春之曲》	35
“差不多”也好	36
战时的文艺作家	38
战时的小说	40
抗战以来中国文艺的动态	44
几个问题	47
战时文艺作品的题材与形式等	52
我对你们却没有失望	56

我对你们还是不失望	59
理智与情感	61
日本的侵略战争与作家	63
犹太人的德国文学	69
奢斯笃夫的去世	71
看稿的结果	74
英国诗人说诗	76
《雷雨》的演出	78
报告文学	81
看了《雷雨》的上演后	84
《前夜》的演出	86
事物实写与人物性格	88
艺术上的宽容	91
略谈抗战八股	93
从兽性中发掘人性	95
大众的注意在活的社会现实	97
关于抗战八股的问题	100
战后敌我的文艺比较	104
文艺与政治	107
——介绍《现代人生与文艺》志	
抗战两周年敌我的文艺演变	109
抗战建国中的文艺	112
——七七建国纪念日作	

《奢儿彭论文集》.....	114
纪念柴霍夫.....	118
语及翻译.....	120
关于战争的文艺作品.....	122
《原野》的演出.....	125
写作闲谈.....	128
杂谈.....	131
语言与文字.....	133
思想的种种.....	136
戏剧与人生.....	138
长篇小说.....	139
谈翻译及其他.....	142
介绍《美丽的谎言》.....	145
《友情与胃病》附记.....	147
《银灰色的死》附言.....	148
《沉沦》自序.....	149
《茑萝集》献纳之辞.....	151
《茑萝集》自序.....	153
写完了《茑萝集》的最后一篇.....	155
《秋柳》小序.....	158
《生活与艺术》书后.....	160
《文艺论集》自序.....	161

《达夫全集》自序	168
《寒灰集》题辞	169
《鸡肋集》题辞	170
《日记九种》后叙	174
五六年来创作生活的回顾	176
——《过去集》代序	
《奇零集》题辞	182
《春天的播种》译后记	183
《二诗人》附记	184
《敝帚集》题辞	185
《达夫代表作》自序	186
《拜金艺术》译者的话	189
《哈孟雷特和堂吉诃德》译后记	212
《幸福的摆》译者附志	214
《易卜生论》译者附记	216
《我俩的黄昏时候》译后志	218
《废墟的一夜》译者附记	219
《感伤的行旅》附记	221
《祷告》译后附注	222
《托尔斯泰回忆杂记》译者附记	223
《浮浪者》译者附记	225
《一位纽英格兰的尼姑》译者附记	227
《在寒风里》序	229

《一个败残的废人》译者附记	231
《达夫代表作》改版自序	233
《阿河的艺术》译者附记	236
《超人的一面》译者附记	238
《小家之伍》译者后叙	239
《纸币的跳跃》作者附记	241
《一个孤独漫步者的沉思·第一漫步》译后记	242
《薇蕨集》序	243
《关于托尔斯泰的一封信》译后记	244
《几个伟大的作家》译者序引	245
忏余独白	249
——《忏余集》代序	
《东梓关》作者附注	253
《达夫自选集》序	254
《断残集》自序	257
《屐痕处处》自序	259
《达夫所译短篇集》自序	261
再谈日记	263
——《达夫日记集》代序	
《徒然草》译后记	268
《闲书》自序	270
《回忆鲁迅》题记	272

《重订西青散记》题跋	273
《厦门天仙旅社特刊》序	274
《白云轩诗词集》序	275
序《不惊人草》	276
序李桂著的《半生杂忆》	279
叙关著《现代报纸论》	281
序冯蕉衣的遗诗	283
《七大问题》序	285
《创造》季刊第一卷第一期编辑余谈	286
《创造日》宣言	289
《创造月刊》卷头语	290
《创造月刊》第一卷第一期尾声	292
《创造月刊》第一卷第二期编辑者言	295
《创造月刊》第一卷第五期非编辑者言	297
《手套》附志	299
关于编辑、介绍以及私事等等	300
《洪水》第三卷第二十五期编辑后	304
创造社出版部的第一周年	306
——《新消息》代发刊词	
《民众》发刊词	311
《大众文艺》释名	314
《大众文艺》第一期编辑余谈	316

《大众文艺》第二期编辑余谈	317
《大众文艺》第三期编辑余谈	318
《大众文艺》第四期编辑余谈	319
最后的一回	322
继编《论语》的话	326
“鬼故事”号征文启事	328
“家”的专号征文启事	329
《晨星》的今后	331
《繁星》的今后	333
接编《文艺》	335
编辑者言	336
星槟两周文艺发刊词	338
《星洲文艺》发刊的旨趣	339
《投效中国的日本人》编者按	342
《鲁迅先生生活散记》编者附志	343
《教育周刊》发刊辞	344
《中条行》编者按	347
编余杂谈	348

今日の中華文學(上)

その動向と作品

今日の中國文學の代表者として活動してゐる作家は先づ茅盾と新らしい人で張天翼、歐陽山くらゐのものでせう。二三年前茅盾が出した「子夜」は大部のもので一般の評判も良かつた。

以前は文學の中心地は北京でしたが、今は上海に移つてゐます。南京もこれに次ぐ中心地ですが、南京の文化はファッショ化した傾向があり、多少カムフラージとして左傾分子も入つてゐますが、結局ファッショ中心で一般の受けは余り良くなく、その實績としてはせいせい英雄主義文學の翻譯が行はれてゐる程度で、作家として舉ぐべき人はでていません。北京は一九二八年以後、政治の中心が移動してからは頓に振はず、現在残つてゐるのは旧い人達で文學を専門とせず大學教授などをやり乍らのデイレッタントが多く周作人氏等はその代表者と云へるでせう。

上海を中心として行はれてゐる文學雑誌は古い処で「文學」「作家」「中流」などが主要なもので、これらは大きな作品を掲載

し、萬に近い發行部數を持續してゐます。この他に半月刊のもので藝術派の小品を掲げる「宇宙風」や「逸經」ユーモア文學を主とする「論語」等がありこの方は萬以上も出る最もよく賣れる文學雑誌です。

中國文壇は最近まで左翼作家の聯盟が霸を稱へてゐましたが、政府並びに上海の帝国主義者の圧迫が激しく、公刊の機を失ひ、ためにその存在は社會的にも影が薄くなつてきました。そこで新らしい文學作家の統一を圖らうと今春百人近くの文學者が集まつて一つの宣言を發しましたが、僕は上海にゐなかつたので知りませんでした。

その宣言によると支那民族の方針、帝国主義打倒、侵略への抵抗と云つたやうなものが内容で、今後の文學は国防文學でなければならぬと云ふ様なスローガンを提出した。この連中は比較的新進の人が多いのですが、これに対立して魯迅と茅盾を中心とした團體があつて文藝工作者達の宣言を出したやうです。それは民族解放、革命的大衆文學と云ふ風なものをスローガンに掲げてゐますか、この對立はスローがんに多少の相違はあるにしても、實際の内容は同一で論争する余地はないと思へるので、結局文壇のデマゴーグを争ふと云つた政治的な感情で、若い人々が舊人の人後に落ちるを潔しどせぬことから發しているだと思ひます。今年の文壇的な問題ではこれなどが最も論じられたが、魯迅の死は恐らくすべてを解決するのではないかと思ひます。

〔译文〕

今日的中华文学(上)

——其动向和作品

作为今日中国文学的代表人物而活动的作家，首先是茅盾，还有张天翼、欧阳山等新人。二三年前茅盾发表的《子夜》，是部大部头作品，一般读者的评论也好。

文学中心地，以前是北京，现在是移到上海了。南京也是一个次于上海的中心地，但南京的文化有法西斯化的倾向。为了装潢门面起见，也允许左倾分子参加进来，但毕竟是个法西斯中心，一般的声誉并不怎么好。就其实绩而言，至多是搞搞英雄主义文学的翻译而已，值得一提的作家还没有出现一个。北京是一九二八年以后，随着政治中心的转移，一蹶不振了。可以说，现在留在那里的大多是旧人，不专搞文学，而是担任大学教授兼创作，周作人氏等是其代表人物。

以上海为中心发行的文学杂志，老的刊物主要是《文学》、《作家》、《中流》等，它们登载大部头作品，发行量一直接近于万册。此外，作为半月刊，有登载艺术派小品的《宇宙风》、《逸经》，以“幽默文学”为主的《论语》等，这些文学杂志的发行量在万册以上，销售量很大。

中国文坛，直到最近以前，是由左翼作家联盟称霸的，然而

由于政府和在上海的帝国主义的加剧压迫，它已失去公开发行的机会，因此其社会存在也长久不了。于是，今春有近百名文学者集合在一起，发表了一个宣言，以图实现新的文学作家的统一。因我不在上海，具体情况并不了解。

观其宣言，有中华民族方针，打倒帝国主义、抵抗侵略等内容，提出了今后的文学应是“国防文学”这样的口号。他们大多是较新进的人。看来，与之相对立的是以鲁迅和茅盾为中心的团体，发表了文艺工作者宣言，把“民族革命战争的大众文学”作为口号提了出来。尽管二者有对立，在口号上有些差异，但我想，实际内容是一样的，没有论争的必要。因此我想，这毕竟是争当文坛宣传者的政治感情用事，出于年轻的人们不肯落后于旧人的心理。今年的文坛问题中，议论最多的是这些，不过我想，鲁迅之死或许是一切都会从此了之的。

李柱锡译

原载一九三六年十一月二十九日日本《读卖新闻》文艺栏

今日の中華文學（下）

その動向と作品

新しい文學運動としては今年の春から提唱された「集體創作」と云ふものがあります。これはソヴィエト辺りから真似たものでせうが、ひとつの題目を二百人とか三百人の文學者に配り、それに依つて書くと云ふので、例へば何月何日のことと云ふやうな題が配られると各方面の作家が小説、小品文、感想、詩と云つたものを以てその日のことを書いて提出するので、その編纂者は左翼系の上述茅盾氏が当り、責任を以て編輯するのです。これは大体中堅以上の作家題目が配布されるので可成広範囲に亘つてゐますが、一冊の本になつてゐるのは上海の生活書店から『一九三六年某月某日』（詳題失念）と云ふのが一冊発行されてゐるのみでせう。これなど面白いことではあるが、はたしてそこから大作品が生まれるかどうかは問題だと思ひますね。

最近物故された魯迅はその文章の銳利さ、思想の前進してゐる点で、一般に敬服されてゐました。併も最後まで變節せず

一本氣で通してゐたこと、文壇切つての人格者であつたことなどその尊敬ある所以でせう。晩年は文學のみでなく、美術方面でも貢献する処、頗る多く、所謂「木刻」(木版画)を唱導し、大いにソヴィエト、ドイツの作品を蒐めてこれを示し、獎勵したので、この木版画は忽ちのうちに廣がり、今日の若い美術家は盛んに製作するようになりました。今度、日本で魯迅全集が上梓されるさうですが、彼こそ本当の前進作家としてこの一派を代表する人ですから、これが日本で讀まれることは大變良いことです。

日本文學の中國文學に與へた影響と云ふものは、先づ多少はあると云ふ程度に止つてゐます。最も盛んなのはソヴィエト・ロシアの文學で、ゴルキーなんか日本以上に問題にされ、熱狂的に迎へられました。其他ショロホフ、バムヒレフ、コラトコフ等は翻譯もされよく讀まれた人達です。日本では大衆文學と云ふと講談風のものらしいですが、中國の大衆文學は文字を平易簡単にして、内容はプロレタリア的で、興味中心でなく、意識中心に画かれ、無學の人の目にも深く感じさせると云つたことが目的になつてゐます。

最後に演劇運動は南京が最も盛んで、それも「話劇」と呼ばれた新劇ですね。上海にも小劇場的の進歩的なものがありましたが、内容が反帝国主義傾向を含んでゐるので、今日では帝国主義の本場だけに上演が許されず、南京に中心が移つたのです。田漢氏など一時は捕縛され、今は許されていますが、日本の轉向作家と云つた位置にあるようです。

〔译文〕

今日的中华文学(下)

——其动向和作品

作为一个新的文学运动，今春以来提倡所谓“集体创作”。这大概是从苏维埃那儿模仿的，做法是将一个题目分给二百个或三百个文学者，使之按题写作。例如，分到议论某月某日之事的题目，各方面的作家便以小说、小品文、感想、诗等形式，写出该日之事，其编纂者为左翼系统的上述茅盾氏，他负责编辑。这大抵给中坚以上的作家分配题目，因而范围相当广泛。已汇编成册的有上海生活书店发行的《一九三六年某月某日》(详题失记)一册。这事固然有趣，但我想，究竟能不能从中搞出大作品，还是个问题。

最近去世的鲁迅，是以其文章的尖锐性、思想的前进性而受到一般读者的钦佩，而且他是至死不变节的纯真到底，又是文坛第一的人格高尚者，这些都是他受人尊敬的原因。晚年，不只是文学，在美术方面作出的贡献也颇多。他提倡所谓“木刻”(木版画)，广泛收集、展览苏德作品，并加以奖励，结果使木刻迅速推广，并在今日年轻的美术家中间盛行起来。据说，《鲁迅全集》将在日本出版，因为他才是真正前进作家并代表这一派，所以《鲁迅全集》为日本人所爱读，是件非常好的事情。